

読みどき旬どき

◆『ルーズヴェルト・ゲーム』池井戸潤（講談社／1680円）「一番おもしろい試合は、8対7だ」と野球好きのルーズヴェルトは言った。会社は存亡の危機にあり、廃部寸前の青島製作所野球部。野球部長が招いたのは、挫折経験を持つ剛腕投手だった。リストラが進む中、奇跡の逆転劇を目指す男たちを描く。

◆『長嶋少年』ねじめ正一（文藝春秋／1733円）風呂屋の下足札の「3」を取り合う時代があった。背番号3の長嶋茂雄にそこが、励まされた子どもたちを、大の長嶋ファンの作者が描く。長嶋のことなら何でも知っている小学5年生のノブオ。悲惨な家庭環境にありながら、ミスターを心の支えに健気に生きる！

◆『不安家族 働けない転落社会を克服せよ』大嶋寧子（日本経済新聞出版社／2100円）結婚しない（できない）若者が急増。家族を持つことが当たり前でない状況を「不安家族」と著者は呼ぶ。雇用不安、家庭崩壊、格差拡大などの社会問題を「家族と雇用の関係」から論じ、再生への具体的政策を提示する。

◆『ボクのつぶやき自伝 @yojikuri』久里洋二（新潮社／1365円）「HP M」のアニメコーナーでおなじみの久里洋二。今年84歳ながら、ツイッターでつぶやく形式の自伝を発表した。昭和25年に上京。コッペパン一つの貧乏画学生時代や手塚治虫が言った驚くべき言葉など話題満載。パラ漫画2本立て付き。

◆『日本よ、浮上せよ！』

21世紀を生き抜くための具体的戦略』村上誠一郎＋21世紀戦略研究室（東信堂／2100円）「原発事故処理の失敗は政治と原子炉の素人の失政である」と断じる元内閣府特命担当相の筆者が、政治の劣化をもたらした小選挙区制の問題点を説き、戦後最大の国難を迎えた日本政治がなすべき戦略を縦横に示した。

【記事より抜粋】